

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 14 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520708

研究課題名（和文） イランにおける「近代性」との邂逅の現場

研究課題名（英文） Historical Loci of Encounter with 'Modernity' in Iran

研究代表者

黒田 卓（KURODA TAKASHI）

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：70195593

研究成果の概要（和文）：本研究は、現在の国民国家イランよりもむしろ広義のイランを想定し、西洋に起源する「近代性」がイランにおいてどのように遭遇され、表象され、咀嚼されたかを現場に立つという感覚で探り当てることを目的にした。その結果、インドにおけるイラン家系出自のムスリム文人官僚の果たした役割やイランから派遣された外交代表や留学生の西洋的近代性の摂取の具体相を生彩に把握することができた。

研究成果の概要（英文）：Making Iran in the broad sense (or Persianate region) rather than Iran as a present nation-state the research object, this project aimed to inquire into how 'modernity' originating from the West was encountered, represented and absorbed in Iran, with a sense like being in the *locus in quo*. As a result of the investigation, I could elucidate the actual roles played by the Muslim scholar-officers from Iranian family backgrounds and the realities of adoption of the Western modernity by the diplomatic representatives and students delegated from Iran.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：西アジア史、比較・交流史、イラン近代史

1. 研究開始当初の背景

(1)イランはトルコ、エジプトと並ぶ中東の大国であるにもかかわらず、1979年のイラン・イスラーム革命から30数年を経た現在でもなお健在である特異な政治体制や原油・天然ガスに代表される天然資源大国としての側面に注目の焦点が当てられがちである。報告者は一貫してイラン近代、とくに19世紀後半以降の民衆運動の展開に着目をして研究

を積み重ねてきたが、19世紀中葉のバーク運動、同世紀末のタバコ・ボイコット運動、20世紀初めの立憲革命、さらには第一次世界大戦前後のジャンギャリー運動とそれを基盤にした「ギーラーン共和国」の展開など、主要な民衆主体の運動を仔細に検証してみると、現体制が後援するイスラーム主義的史観、および旧王制下で称揚された国家ナショナリズム史観とは異なる様相、すなわちイスラ

ームもナショナリズムもそれぞれにイラン近代にとって重要な要素であったものの、各々の公定イデオロギーによっては削ぎ落とされがちな、社会主義的ユートピア思想も内包する多層的な民衆的世界の存在のありようが浮かび上がってくる。こうした社会的次元において多様な潮流がいかんして生み出され、形成されてきたのか、その源流に遡上して探索することは、現代のイランとその行く末を見定めるうえでも意義深い研究課題であると考えた。

(2)米国プリンストン大学比較文学教授でイラン出身のハミード・ダバーシーは、エドワード・サイードの後継者としてオリエンタリズム批判とポストコロニアル批評の見地から、近年発刊された故国の近現代に関する意欲的な著作 *Iran: A People Interrupted*, New York, 2007 (邦訳『イラン、背反する民の歴史』作品社、2008) のうちで、理性と啓蒙を「銃剣」をもって唱導する「植民地主義的近代性」と、それに発端する「近代」と「伝統」を二項対立として捉えるイラン人識者の混乱振りを批判すると同時に、「反植民地主義的近代性」(反近代ではない)なる概念を提唱し、それを体現するテキスト生産の現場に立ち入って検討を試みている。サイードを彷彿させる政治と文化の輻輳的叙述やテキスト批判の手捌きには瞠目すべき点も多いが、いかんせんこの書が現代までを射程に収めた通史の体裁を取っているためもあってか、①取り上げられているテキストがきわめて限定的であり、テキスト間の参照や連係がさほど注目されていない、②社会・政治的背景、つまりはコンテキストとテキスト間のリンクについて、部分的言及があったとしても、体系的あるいはクロノジカルな分析が弱い、などの難点も散見される。また③後の改革運動や民衆運動にテキストがどう連動するのかという観点も薄弱であるといえる。とはいえ、ダバーシーの試みは、従来のイラン近現代史研究が閑却してきた文化的創造に照明を当てたという点できわめて示唆に富むものである。というのも、従前の政治史中心の概説では、主要な制度の概略とその変化についての記述が大半を占め、西欧近代との遭遇もともすると一方的な影響関係だけが強調されてきたといつてよいだろう。一方、個々の政治家や思想家を扱うモノグラフは、彼らの手になる枢要なテキストを分析対象にしてはいるが、そもそもそれらテキストが洗練され体系化されたものであることを前提にしていて、いわばファーストハンドの「近代性」との邂逅の生々しい現場を浮き彫りにするテキストを題材とするものではなかった。また文学史の分野では、ペルシア語散文体の形成や言語改革、また伝統的なペル

シア文学との連続性の面が強調され、むしろそれら広義の文学テキストが社会的・政治的連関性をいかに備えているかは関心の埒外に置かれるきらいがあった。

2. 研究の目的

(1)上記した研究の背景を受けて、本研究では、イランが西欧に起源する「近代性」(modernity)と邂逅する現場を中心的テーマとし、時代的には報告者が従来扱ってきた時期以前、つまりヨーロッパ(おもにイギリス、フランス、ロシア)との本格的な接触が始まる18世紀後半から19世紀80年代ぐらいまでを対象時期に設定し、研究素材としては、主として当該期における代表的な訪欧旅行記(safar-name)や地誌、散文文学作品を取り上げて、それらのテキスト作成者を取り巻く政治的・社会的背景の解明、そしてテキストに表れたヨーロッパ起源の文物、制度、思想などがどのように表象され認識され、彼らの文化的フレームワークの中で比較・評価されたのかを、一連のテキストの収集と読解・訳出・分析を通して明らかにすることを目的とした。また併せて、それらが19世紀後半以降の政治・社会改革や民衆運動にどのような知的基盤を提供し、影響を及ぼしたのかも考察することにしたい。

(2)前項で素描した研究動向を踏まえて、本研究では、啓蒙と植民地化の両義的契機を孕んだ「近代性」との邂逅現場の視点を重視し、ヨーロッパとの直接的な遭遇の経験がおもに記されたテキスト(したがって、必ずしも洗練され体系化されたものではない)を分析対象にし、時系列的なコンテキストの変容をも考慮に入れつつ、テキストの表象の在りようとその軌跡を追うとともに、今までの研究成果と突き合わせることで、より多角的な近代史叙述の構築を試みたい。報告者は以下の3つの時期に着目して、それぞれの時期の代表的なテキストを収集し、解読・訳出・分析することにする。

①インド在住のイラン家系出自ムスリムによる旅行記・地誌 —18世紀後半から19世紀初頭—

18世紀中葉以降のイギリス東インド会社によるインド亜大陸における植民地化の進行に伴い、ハイデラーバード、ムルシダーバード、ラクナウを拠点とする地方宮廷に仕官していたイラン家系出自官吏やイラン系商人が、イギリス当局との接触・交流を深める中で、ペルシア語(当時まだムガル朝の公用語であった)で直接イギリスに渡航してその見聞を旅行記にまとめたり、イギリスに由来する新しい知識を基に地誌を著したりする機会が生み出され、一群のインド特有のペルシア語を使ったハイブリッドなテキストが

産出された。Mohammad Tavakoli-Targhiの言う「ペルシア語的圏域」(Persianate)に属するテキストである(*Refashioning Iran: Orientalism, Occidentalism and Historiography*, New York, 2001)。

②イラン人外交官と留学生による旅行記—19世紀前半—

フランスのナポレオンによる中東、なかでもイランへの影響力拡大に対抗するべく、イギリスはイランとの友好・通商関係の確立を画策した。そのため、イギリス・イラン両国の外交代表が互いに往来することになり、外交報告という形式を取った旅行記が書かれることになった。また、この時期の2度にわたる南コーカサスの領有権をめぐるロシアとの戦争も、ロシアへの外交使節派遣を伴うこととなる。他方で、同じころにイラン西北部タブリーズの皇太子の政庁から留学生が2次にわたり派遣され、西欧の文物、技術の導入が図られ、彼らも外交官とは異なる角度からヨーロッパ、なかでもイギリスでの体験を記録として残すことになる。

③ペルシア語近代散文学と民間人の旅行記—19世紀後半—

「近代性」の波にイランより早く洗われ始めていたオスマン帝国では、いわゆるタンズイマート後期に「新オスマン人」たちとの交流にも触発されたイラン亡命知識人のサークルが帝都イスタンブルで作られていた。イラン国内での政治的抑圧から解放されて、そこでは活発な文筆・言論活動が行われた。その中からヨーロッパの文学作品を翻訳・紹介する営為を通して、近代ペルシア語散文スタイルが確立していくことになる。一方、同世紀前半とは違い、民間人、とくに政治的反体制派がヨーロッパに旅する機会が格段に増大し、彼らも旅行記を残すことになる。

本研究は、以上の3つの時期のイラン国内外の変化、および代表的なテキスト作成者の変遷を踏まえ、イランが「近代性」と邂逅し、それとどう格闘したのか、その足跡を、文化を政治・社会的文脈とクロスさせつつ、追究することにした。

3. 研究の方法

(1)研究方法は全体として、上述の研究対象時期の3区分の各々の時期に書かれたテキスト(おもに訪欧旅行記、地誌、文学作品など)を網羅的に収集し、併せて重要なテキストに関しては、その作成者の社会的・政治的背景を探る必要から関連文献・未公刊史料の収集をまず行う。次いで、当該時期の代表的と想定されるテキストを選定し、著者の伝記的情報、執筆動機、同時代の社会的・政治的背景などのコンテキストを丹念に調査し、そのうえでテキストの精読と訳出に取り組む。その際、同時期の他のテキストとの異同を探

究するために、ヨーロッパ起源の文物、政治社会制度、思想や習慣など、比較となるポイントを設定することにも留意する。また上記の3つの時期区分と研究計画の年次進行を可能な限り合致させるように努めたい。以下大きく初年度とそれ以降とに分けて、それぞれに取り上げる予定のテキストの説明と分析方法の概容を記す。

(2)初年度は本研究課題に関連性の強い先行研究をより精緻に整理する作業から始める。そのうえで立って、「インド在住のイラン家系出自ムスリムによる旅行記・地誌」を扱うことにし、おもに以下のテキストおよび関連資料の調査・読解・整理作業を実施する。

①イギリスのプレゼンスを強く受けたインド東部ラクナウ出身のシーア派ムスリム官僚アブー・ターレブ・ハーン(Mirzā Abū Tāleb Khān)のヨーロッパ旅行記、*Masīr-e Tālebī* (『求道者の旅路』、正称:*Ketāb-e Masīr-e Tālebī fī Belād-e Afranjī*, 3vols.)。1799年から1802年にかけて行われたヨーロッパ旅行(とくにイギリス)の記録で、ペルシア語による本格的で大部な旅行記としては初期の一つ。1812年にカルカッタで初版刊本が出るも、それに先立つ1810年に英訳本(*The Travels of Mirza Abu Talib Khan in Asia, Africa and Europe*, trans. by Charles Stewart, 2vols.)が刊行され、その内容が欧州で知られるようになった。

②イラン南部のシューシュタルの名家出身でデカン高原のハイデラーバード宮廷に仕えたミール・アブドル・ラティーフ・ハーン・シューシュタリー(Mir 'Abdol-Latif Khān Shūshtarī)の手になる一種の世界地誌、*Tohfāt ol-'Ālam* (『世界の賜物』)。この著者はヨーロッパ旅行の体験こそなかったが、イギリス東インド会社関係者との交友関係を通してヨーロッパ、とりわけイギリスに関する第一級の情報を入手し本書を上梓した。初年度の研究方法上の主眼は年代的に最もヨーロッパとの接触が早かったインドにおいて広い意味でのペルシア語圏域の知識人がどのようなヨーロッパの「近代性」を描いたかを探ることにある。

(3)2年度以降は19世紀前半と後半に分けて、前半の特徴である、イラン人外交代表と留学生の訪欧旅行、後半の新しい特徴である、亡命知識人の言論活動に係わる代表的なテキストを取り上げて分析を進める。まず外交代表の記録としては、ミールザー・アボル・ハサン・イールチー(Mirzā Abol-Hasan Īlchī)の*Heyrat-nāme* (『驚愕の書』)が挙げられる。著者はイギリスとの条約交渉に派遣されたガージャール朝宮廷高官で、後に外務大臣も務めた。彼の2度のイギリス訪問(2度目は

ロシアにも滞在)のうち、本書は最初のロンドン滞在記録。イランで出版された刊本にはイスラーム的倫理に悖ると見なされた部分が割愛されているため、本書の別写本に基づく英訳本(ただしこちらにも統計的数字や詩文を省略している)、M.Morris Cloake (trans. & ed.), *A Persian at the Court of King George 1809-10: The Journal of Mirza Abul Hasan Khan*, London, 1988 も併せて参照することにする。留学生の滞在記録として唯一伝世されているものは、ミールザー・サーレフ・シーラーズィー (Mirzā Sāleh Shīrāzī) の旅行報告記。著者は1815年にアゼルバイジャン州の都タブリーズから皇太子アッパース・ミールザーによりイギリスに派遣された第二次留学生5人のうちの一人。4年余りの滞英期間の記録。外交や留学といった公式ルートに乗った滞在が開始されたこの時期のテキストは、前代に比べてもイランの近代の黎明期に深く関わっていて、サーレフ・シーラーズィーがイランの「新聞の父」とも称されるように、現実にヨーロッパ起源の文物や制度が移入され始める有りさまを探るうえで重要である。さらに、最終年度は反体制派の亡命知識人の言論活動に主として注目する。とりわけオスマン帝国帝都で故国の専制批判を共有するグループが存在し、その中でペルシア語による言語教育・改革に携わる一方、翻訳や批評により平易な散文作品の先駆けとなった、ミールザー・ハビブ・エスファハーニー (Mirzā Habīb Esfahānī) の生涯と業績に光を当てる。後の民衆運動、革命運動に大きな刺激を与えたと評される、ジェームズ・モーリア著『ハジ・ババの冒険』のペルシア語訳をテキスト分析の対象にした。こうした作業を介して、後の改革運動や革命への胎動との連関を探究することにする。

4. 研究成果

(1)イランにおける「近代性」との邂逅に関わる文献・資料の収集。ロシア語で記された研究書・文献が相対的に手薄であることを考慮して、初年度は2010年9月にロシアに調査研究のために出張を行った。モスクワのロシア国立政治社会史文書館 (RGASPI) にて、イラン近代史に関連する未公開のロシア語文書をおよそ600葉複写注文し翌年1月に入手した。それと同時に、研究課題テーマに関わるロシア語文献を10点近く購入した。2年度の2011年9月には、文書調査と文献収集を目的に、イランに出張を行った。調査については、テヘラン大学中央図書館、イラン・イスラーム議会図書館・資料センター、イラン現代史研究所を中心に、短期間の滞在であったためおもに文書・文献の所在調査を実施した。またペルシア語で記された近刊書

籍、なかでも数少ないながらも19世紀の旅行記の類を含めて100点近く購入した。最終年度は、次項で述べるように東日本大震災の影響で研究計画が多少遅れ気味にならざるを得なかったため、実施を延期していたインドへの調査研究出張を2013年2月に行った。インドでの調査は初めてであったので、以前から連絡を取り合っていたバングラデシュ・チッタゴン大学歴史学部准教授の Abd Al-Masum 氏の助力を得た。同氏はカルカッタ (コルカタ)・ジャイプル大学で博士号を取得した関係で、カルカッタに学術的な繋がりを強くもっていたため研究上の支援を仰いだ。調査の主目的はインド在住のイラン家系出自ムスリム文人官僚の動向や彼らの残した記録に関してであり、カルカッタではインド国立図書館やベンガル・アジア協会図書館などを利用し、関連する資料の収集に努めた。さらにインドにおけるペルシア語写本の一大宝庫ともいべきパトナにあるホダー・バフシュ東洋図書館 (Khuda Bakhsh Oriental Public Library) を訪問し、カルカッタより紹介をしてもらっていた館長に面会し、実質半日の滞在であったが、ミールザー・エエテサーモッディーン著の未公開の訪英旅行記 *Shegarf-Nāme-ye Velāyat* (『ヨーロッパの驚愕の書』) の写本を数点、またイラン出身の学者アフマド・ベフバハーニーのインド・ヨーロッパ情報を盛り込んだ、*Mer'āt ol-Ahvāl-e Jahān-namā* (『世界の諸相の鑑』) なる旅行記写本2点を実見し、前者の比較的书写年代の古い写本について電子複写の許可を申請中である。さらにアブー・ターレブ・ハーンの故郷ラクナウやデリーにおいても、いくつかの学術機関を訪れ資料調査を行った。エエテサームの著書のウルドゥー語訳本を含め数点の関連書籍を購入した。

(2)「近代性」の邂逅の現場を記録するテキストの読解・訳出作業など。2011年3月11日の大震災発生以降、報告者の所属大学の研究室も大きな被害を受け、およそ半年余り十分な利用がままならない状態が続いたため、当初予定していた研究方法・計画は若干変更を余儀なくされた。とりわけ最終年度の計画は、半ばについては着手したが、もう半分は未了のままに終わった。とはいえ、計画に組み込んでいたほとんどのテキストに関しては、信頼に値する刊本や英訳書を購入し、その重要部分について読解を完了し、大半を訳出した。とくに研究期間初年度秋に、所属部局の公開講座で一般向けに講義を行うのに照準を合わせて、ミールザー・アブー・ターレブ・ハーンの『求道者の旅路』、アボル・ハサン・イールチーの『驚愕の書』、ミールザー・サーレフ・シーラーズィーの『旅行記』のテキストを精読し、比較となりうる箇所

について日本語に訳出した。その成果は同公開講座講義資料集（受講者にあらかじめ配布する冊子）の44～96頁に公表した。もちろん一般を対象にした講義であるので、相当噛み砕いてはいるが、3者の比較を講義の基軸に据えて、この時期のイラン系旅行者・外交代表・留学生がイギリスで目にした新奇な文物や優れた（と彼らが考えた）社会・政治制度に感嘆しながらも、同時にムスリムとしての矜持や自己同一性にはほとんど揺るぎがないことを結論として示した。本講義の要旨は以下のURLで参照することが可能である。

http://www.intcul.tohoku.ac.jp/dosokai/alumni_news/kaiho_9files/alumni_news_9.pdf

また、初年度にはアブドル・ラティーフ・シューシュタリーの『世界の賜物』、2年度にはアブー・ターレブ・ハーンのイギリスからインドへの帰路の記録に関して、所属研究科の「中東」表象研究会にて研究発表を行った。なお、最終年度には、ハビブ・エスファハーニーの『ハジ・ババの冒険』ペルシア語訳の読解に手をつけ始めたが、研究計画の一部変更もあって、おもに18世紀インドからの旅行者の記録に集中することにし、次項で述べるエエテサームやディーン・モハンマドの旅行記テキストに取り組み、その成果の一端を「中東」表象研究会にて発表した。

(3) 公表した研究成果など

①震災の影響で出版が遅れていた東北大学東北アジア研究センターの叢書に、「イランソヴィエト社会主義共和国（「ギーラーン共和国」）におけるコムニスト政変」という論考が掲載された。これは1920年にカスピ海南西沿岸ギーラーン州に成立した地方的な社会主義を標榜する政権と、ソヴィエト・ロシアとの歴史的な関係をロシア語アルヒーフに基づき再構成する一方、ソヴィエト期そしてポスト・ソヴィエト期のこの事件をめぐる歴史認識の変遷を実証的に追ったものである。もとより本論考は、イランにおいて「近代性」の一つの解釈が行き着く先を読み解いたものだが、本研究課題との関連性はさほど強いとはいえない。

②本研究課題により直接的に関わる研究成果としては、所属研究科の『論集』に公表した「18世紀後半インド在住イラン家系出自ムスリムの訪欧旅行記」と題する論文が挙げられる。本論考を執筆した背景には、アブー・ターレブ・ハーンだけが特異で突出した事例でないという発見があった。というのも、アブー・ターレブ・ハーンの出自や彼の生きた時代環境を具に調べていくと、ムガル朝の政治的衰退・解体に伴い台頭しつつあった地方宮廷に、王朝の衰微により職務や社会的地位を失って庇護を求めたムスリム文人官僚層

の存在が浮かび上がってきたからである。彼らは大半が祖先や父祖がイランから移住してきた家系に属し、ムガル帝国の共通語たるペルシア語に堪能で、それによる書記・行政技能を身につけ、また詩文をたしなむという共通する社会背景や素養をもっていた。さらに言えば、彼らは多くの場合、ベンガル、ビハール、アワドなど、イギリス東インド会社の直接間接の影響力が及んでいた地域で活躍し、同会社の軍人や社員と密接な交友関係を取り結び、特殊な場合その縁でイギリスはじめヨーロッパにも赴いたのである。したがってアブー・ターレブ・ハーンの訪欧旅行は確かに異色のケースではあるが、だからといって孤立したものではなく、それなりの前例があった。そうした事例の中で、旅行記を残したのがミールザー・エエテサーモッディーン（1730～1800頃）とディーン・モハンマド（1759-1851）であった。本論考は、この両名による旅行記の中味を考察し、アブー・ターレブ・ハーンの生涯や業績、彼の作品への評価などと併せて論述することを通して、18世紀後半のイギリスによる植民地化の最初期におけるイラン家系出自ムスリム文人官僚層と「近代性」との遭遇の現場を炙り出そうと試みたものである。またアブー・ターレブ・ハーンの『求道者の旅路』の内容分析への前半部分を成すように意図されたものでもある。

③図書として2点の分担執筆を行った。朝倉書店の朝倉世界地理講座のシリーズ第6巻『西アジア』の「イラン人」という一項では、ナショナリズムの多様な系譜的背景を概観するとともに、近年イランでも在外イラン人識者の議論にも触発され、ナショナリズムの「近代性」を強調する言説が現れ始めていることを指摘した。同書のもう一項「テヘラン」では、このメガロポリスの建設発展の過程を概略辿るとともに、現代の都市問題にも言及した。もう一点は、丸善出版の『世界宗教百科事典』に「バハーイー教」という項目を執筆した。このイスラーム・シーア派から分岐した世界マイノリティの現況のみならず、19世紀初めからのシーア派宗教思想界の思潮と関連づけて論及した。つまり、本研究課題との関連で言えば、むしろ「近代性」と接点を保ちつつも、発生においてはそれとは無関係なシーア派在来思潮との連続性の相の重要性を指摘した。

④今後の課題との関連。やはり十分に掘り下げができなかった、イスタンブールでのイラン人亡命者グループや、そのなかでもハビブ・エスファハーニーの言論活動の動静を跡づけたい。現場のもう一つを、歴史背景も勘案したテキスト分析を通してきちんと把握することが本研究課題をさらに深める有効な手法だと考えるからである。さらに、もう

一つイラン国外での接触ゾーンとしては南コーカサスも看過できない。これらの諸点は次の科研課題で解明せねばならないところである。

5. 主な発表論文など

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 黒田 卓、18世紀後半インド在住イラン家系出自ムスリムの訪欧旅行記、国際文化研究科論集、査読有、20号、2012、pp. 95-113
- ② 黒田 卓、イランソヴィエト社会主義共和国(「ギーラーン共和国」)におけるコムニスト政変 ―その歴史の再構成と歴史認識の変遷―、岡洋樹編『歴史の再定義 ―旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育』東北アジア研究センター叢書45号(東北大学東北アジア研究センター)、査読無、2011、pp. 133-168

[学会発表] (計1件)

- ① 黒田 卓、イングランドに渡ったイラン人 ―西洋近代との邂逅の現場から―、東北大学大学院国際文化研究科第17回公開講座、2010年11月13日、東北大学川内キャンパス・マルチメディア棟

[図書] (計2件)

- ① 黒田 卓、丸善出版、『世界宗教百科事典』(井上順孝編)「バハーイー教」、2012、pp. 192-193
- ② 黒田 卓、朝倉書店、朝倉世界地理講座第6巻『西アジア』(後藤明、木村喜博、安田喜憲編)4章3節「テヘラン」、9章2節「イラン人」、2010、pp. 135-137, pp. 267-271

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒田 卓 (KURODA TAKASHI)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：70195593

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：